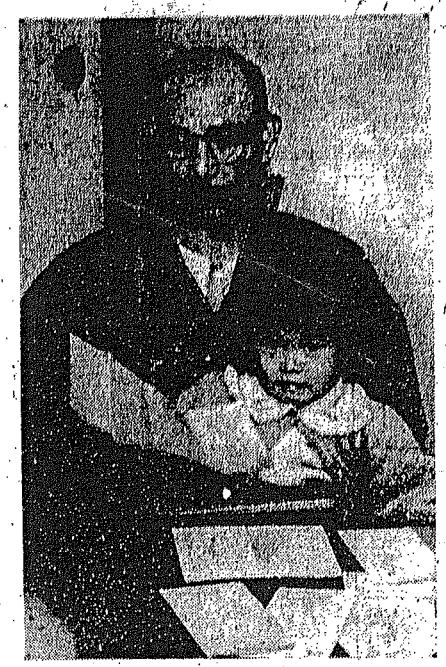
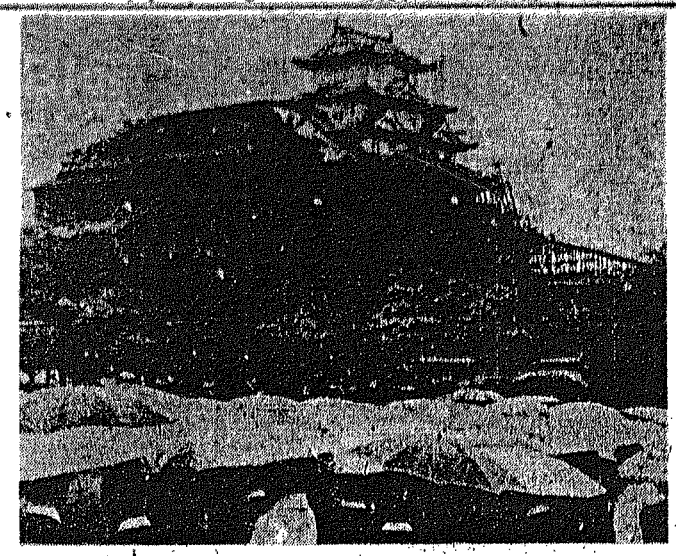
お城の老ガイドさん

鮫田藤一さんをたずねて



午後6時過勤してからすぐ家へ。孫の麻枝ちゃん（二つ）をひざにガイドをした団体や，新婚さんからお礼の手紙がきているのを読む。1日で一番うれしい時だ。多い日には10通近くもある。

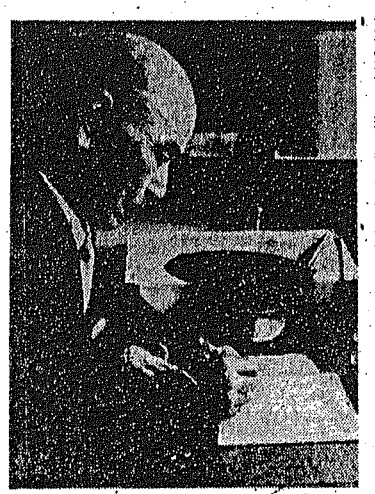
八月から大学の厳しい練習員は「観光」が，昼の原始林から吹き下げる冷風の音をいっぱいに受け，伸びゆく盛期を迎えている。明暗のシンボル「城」ここへやってくる観光客は年々ふえ続け，今年の三月からは，とくに城をめざして来た，とる名城を観光に期待しながら，金閣銀閣に比べ，「喜寿」が間近の人たちには物珍しがられていない，例の一日，このガイドさんを差がねった。（文・写真・福原正治記者）



忙しいほど楽しい

勤続28年の生き字引き

暗しいまる例の中で高校生の団体約三百五十人を前に説明する鮫田さん。マイクを使用しないが全員に聞き取れるだけの声だ。＝西の丸で



ガイドを終わって事務所に帰った鮫田さんはガイド団体名とガイド料金を記入する。人員によって料金は違うが1回250―300円。これらのお金は登録料といっしょに市の金庫へ。

多い日は五、六回

◇…「曇りさんこの悪天候のなかをよくおいでドさいました。金閣にそこの城があります。が，観光城はそのうちでも一とマイクも持たず，元気な声で説明している。口ひげにメガネ，ちょっとエンタツを思わせるような老人，この人がベテラン・ガイドの鮫田岩一さん。

＝観光市西本町八〇ノ三＝だ。鮫田さんは朝八時に約二〜三時間で帰れる。お城管理事務所の黒板にはその日のガイド申し込み団体の名前が書いてある。多い日には五，六回もこなければならない。一回に一時間半かかり，道のりにすれば約三キロ。こんな日は昼食をとることもできない。だが鮫田さんはこのような日が一番楽しみだという。

酔っぱらいに泣く

◇…お城にやってくる観光客には会社，婦人会，小，中，高校生などの団体が多くガイドもこのグループ。新婚旅行組も多い。学生グループになると，みんな鮫田さんの説明に聞き入り，メモをすることもたびたびある。新婚組は記念にというので鮫田さんもいっしょにお城をバックに写真をとった。しかしてくるかが多いそうだ。しかし会社や男子グループになると，三人の酔っぱらいがいて，説明をしている鮫田さんにおっかぶさんなどというのもお城がこの城に住みついたころを知っているんか」「つまんん」説明はやめんかい。はようバスに乗って酒を飲まんとあかんわい。酔客から城なんか見物せんでも変えやんかに」と冷笑を浴びることがあるそうだ。一生懸命にガイドをしている鮫田さんは涼くに泣けないような気持ち。

雨の日も風の日も

◇…鮫田さんがこの道にはいったのは昭和十年六月。自宅近くの東岸新聞組路十場を譲してからだ。ガイドというて城に関してなにも知らなかった鮫田さんは，城に関する本を読むほか，城を研究している人たちからいろいろな話を聞き，スタートした。しかし，〝婦路城建設案内人〟というどこにも身分保障されない同書き。当時の登録料は大人十銭，十人以上二十五銭，小学生百人で五十銭だった。太平洋戦争が激しくなるにつれて見物に来る人も少なくなり，十九年から終戦まで休業のありさまだった。二十四年九月から姫路城建設案内人」として城を訪れる観光客は次第に増加，相生市，赤穂市，加古川市，姫路市，明石市，神戸市，大阪市，東京，名古屋，京都，奈良，伊勢，熱海，箱根，日光，長野，金沢，福井，岐阜，大津，和歌山，高野山，高砂，宝塚，神戸，大阪